

ヨダレン

——しかし、いま、私の年々はためいきのうちに過ぎてゆきます。主よ、ただあなただけが私のなぐさめ、わが父、永遠です。それに反してこの私は、順序も知らない時間のうちに散らばっています。あなたの愛の火にきよめられ、とかされ、あなたのうちなるはらわたともいべき私の思いは、さまざまの騒々しいことがらによって、ずたずたにひきさかれています。

(アウグステイヌス「告白」より)

アダムとイヴが風俗ビルの空き家に住むのは今の虚無だ。そんなことを、この世の最期を詠った詩人が提唱していたらしい。ああその通りだな、間違いなくその通りだ。道行く人々に今から訊ねればそんな答えが返つてきそうな気がする。

だが、そんなことは決してない。

燻ぶつた過去の幻想。誰が燻ぶらせたのかと問わせないように、辺りで立ち込めるのは霧雨。鎮火する焦躁。前髪がべつたりと額に張り付き、酷く気持ちが悪い。気晴らしに深呼吸でもしてみようかと息を大きく吸い込めば、マスクから通った空気が私の喉を湿らす。潤った、などという表現は決してしないのだ。その湿り気は甘い。有害な物質の味が私の舌を撫でる。その妙な優しき。私は舌打ちをした。やはり、気は晴れない。

気分が悪いが天気も悪い。とある郊外の一角、であつたらしきところ。昼か夜か判断し難い空の下で、私は一人歩みを進めていた。時折、すすり泣く風が私に救いを求めるようにそつと身を寄せる。怖いよ、怖いよ、と。そんな調子で耳を擦るのは、赤ん坊の泣き始めとも区別がつかない声。頑なに無視を続けていた私だが、散乱する瓦礫に躓いたり、遠方から聞こえた銃声に身を固めたりした拍子に、狂つたように笑い出した風を私は無視することが出来なかつた。風に舞い、何かが私を覆う。足が止まる。私は反射的に目を瞑つた。視界を隠したのは砂塵か、コンクリートの破片か、腐つた肉片か。なににしても変わらない。私は特に気にするわけでもなく、右手でそれを払い除ける動作をとる。開きかけた視界に映つたのは、一枚の紙切れ。文字が書いてある。視界の端で捉えた文面。過去の残滓。すると、私は心に立ち込める湿つぽさが徐々に乾いていくのを覚えた。払い除けようとした紙切れを、半ば強引に掴む。

とりわけ私は文字が読めないわけではない。ただただ鬱陶しい。それだけなのだ。

ここ最近気候の変化が激しい。そんな気がする。霧雨は何食わぬ顔で去つていた。そんな中で私は、上着のポケットから一本のマッチを取り出す。いつ手に入れたか知らないが、見慣れた形のマッチだ。独特の香りがマスク越しに私の鼻孔をくすぐる。すると、燻ぶらず消えもしないかのように燃え盛る炎が脳裏を過り、私は果てしない高揚感を覚えた。心の湿り気が乾き、その瞬間には平常を通り越して水分を枯渇させる。

すると、私の手にあつたマッチは轟々と燃え盛り、まるで空を覆う暗雲を掻き消すように燃え上がっていた。真っ赤な紅色だ。淀みない赤だ。間もなく、私は心と体が熱くなるのを覚える。

「燃えろ、燃えろ」

不意に口から漏れた呪詛のような言葉。自分でそう形容するのはおかしいだろうが、言葉と共に薄笑い声が唇から滑り出している。自身でも感じていたのだから、なににしても救いようがない。

止まらない薄笑い、呪詛。それらも熱の糧にしようと燃える炎、その轟音の延長線上で、燃える紙切れ。ちりちりと音も立てず、灰も残さず、あえて残したものとさえその儚さであろうか。しかし、感傷に浸るほどの余韻はない。

そもそも感傷に浸るほどのものがあつたのかと疑問に思う。それは紙切れが燃えてから数秒後、マッチの炎が消えてからのことだ。薄笑いも呪詛も、沈黙の中に溶け込んでいた。

ここ最近気候の変化が激しい。霧雨に代わり土砂降りが、なんの前触れなく現れた。私は慌ててマツチをしまう。その後、下に向いた視線が水たまりを捉えた。水面に鏡のように映ったのは、やつれた頬にぼさぼさの短髪の少女。それ以外は形容する必要はないだろう。私は舌打ちをした。それが誰に対してなのかは忘れたが。羽織るパーカーのフードを被り、水たまりを踏みつけて駆け出す。体が凍える。急がなくてはと、無意識に呟いた。

心は湿っていた。しかしそこに、濁流のように水が流れ込むことではなく、一定の湿り気を保っているようだ。それがなんとも気持ち悪くて、私は足を速める。すると転びそうになる。

頭を掠めるように風が通り過ぎた。今度は笑いもしない。無表情で私を見つめている。

世界は滅びた。私という一人のヒトがそう言うのは、世界の虚無とでもカテゴライズされるのだろうか。昔盗み読んだ書物には、その昔の情景が文章としてありありと描かれ、そこに挿入された絵画や写真は鮮やかな色彩を誇っていた。当初その本を読んだ私は、感動した、または驚いたなどということはなく、ただただそこに記された事実を知っただけだった。知ってしまった、などということは言わない。

その時も、今も、変わることを知らない灰色の空を私は眺めながら、想起したことが炎の燃え盛る音に消えていくのを覚えた。現に炎は燃えていないのだから、恐らく私の胸の内という場所で自然発火でもしたのだろう。陳腐な表現だな、と自分でも呆れてしまう。ならば何を燃料にしたのか、ということは問わなかった。単にくだらないのだ。とある廃ビルの屋内の一角。誰にも聞かれぬ溜め息が小さく響く。

私は雨が好きではない。それは雨に打たれば体が冷えるから、ということが理由でもある。だが最もな理由をあげるとしたら、私はその雨に含まれているものが体に良くないと知っているから、ということだ。その雨に含まれているものを放射性物質という言葉で昔は表していたらしい。放射性物質が体内に大量に溜まれば、体調不良を引き起こし最終的には死に至る。昔はそんな危険な物質が大量に雨に含まれていたということはなかったらしい。単位を用い、過去と現在を比較するようなことを私はしないし、むしろできない。だがそれは確かな事実のようだ。

また、この世界は滅びた、と近年言われるようになった所以に、放射性物質が密接に関わっていることを私が知ったのは最近のこ

とだった。元より、世界が減びることの要因が他にあることを前から分かり切っていたのだが。

あたかも空がさめざめと涙を流すように、降る雨を窓から眺めながら、その背景にある灰色の空に視線を移す。時折雲の切れ目から差し込む淡い光が、私には異様に眩しくて眼を細めた。炎を見つめる時にはそんなことはないのに。煙とも炎自身とも取れぬ何かが、胸の内にあることを私は確認する。燻ぶつた音を立てるそれが、みるみるうちに静まっていくのを見つめていたからか、私は背後から聞こえた声に気付くのが遅れてしまった。

「こんなところで女一人とかあぶねえな、おい」

私には前触れなく聞こえた声。覇気はない。咄嗟に動かす、首、手、足。手に握るのはマツチ。取り出す動作は慣れたというよりはほぼ無意識だ。幾度となく訪れた危機により、刻み付けられたプロセス。寸刻待たず、舞い上がる炎は手元のものだけではなからう。熱い。熱い。だが、燃えろ。燃えろ。燃えてしまえ。ふと脳裏を過りかけた過去は炎にまかれ、消える。表情が歪む。確かなその感覚。それが狂気か恐怖かは問われない。そのような憶測もなにもかも炎に消えるのだ。

「なんだ？ 人が忠告とくしてやってんのに、嬢ちゃんってやつは——」

声は聞いた。だが、それを無為に帰すが如く、炎が声の元に伸びる。無情も無常も覚えない。そのような方向性はいつしか忘れていた。まかれる影、人影。ただ掻き消えろ、燃えろと思う瞬間、間の抜けた声を炎の中に聞いた。

「まあ気持ちは分からないこともねえが、な」

炎の燃え盛る音にも掻き消されない声。何故だ。私が自問した時には、鋭い痛みが脳に突き刺さり、言葉もイメージも何もかもが遮断される。

不意に失う方向感覚。ここは何処だ、と一瞬の記憶の欠如。間もなく私がそれらを感じ取れるのだから、それらは至極刹那的なものだった。ぼやける視界。酷い耳鳴り。これはいつか感じたことのあるものだ。そんな想起も胸の内の炎が燃やし尽くそうとするだろうが、今はそこにも外にも熱さは感じられなかった。それよりも鈍器で殴られたような痛みが頭に余韻として残るのだ。おもむろに頭を抱えてしまう。

「落ち着けよ。嬢ちゃん。出逢いがしらにするのは攻撃じゃなくて挨拶だろ？」響いた声には緊張感がない。「アイツもそう言うに違いないえ」

「……いつの時代の、ヒト、だ。お前、は。それ、よりも、これは……」

「アンチサイコ用の特殊音波……。遺伝子情報に基づき、脳から体に電子として流れる異種クオリア。それによる心身のシンクロナイズを一時的に乱す。誤った認識を及ぼす特殊音波で、な。ああ、あくまで一時的だ。軍用みたくに後遺症はないから安心しろ。俺がアイツに頼まれて改造したから。おかげで使える数は限られてるが」

だからか。おかげで思考がままならない。おそらく私は、先の話もほとんど理解出来ていないのだろう。だが、口にする言葉は無意識に決まっていた。

「……なにが、目的、だ」

「なんでもねえよ。だいたいお前が攻撃してきたんじゃないか。こっちが聞きてえ」

「……お前は、本当にいつの時代のヒトだ」

ちげえねえ、と躊躇なく吐き捨てるヒト。数メートル先に見えたその表情は穏やかだ。

穏やか。そのようなものを久しぶりに見たせい、眼が痛い。因果関係がややおかしいのだが。

異様に眩しく感じるのだ。これも特殊音波というやつだと、私は思考を遮断した。

まったく、今日は本当に気分が悪い。

あちらこちらに散漫した炎は、小さく黒い煙を上げている。

「いちおう元科学者なんだ。俺は」

頼まれてもない自己紹介がおよそ五メートル先から聞こえてくる。私の言葉を無視した声、声色もろもろ全てに嫌気がさす。

この廃ビルから、少なくともこの部屋から出ていけ。私はつい先ほどそう言ったのだが、科学者であった男は聞く耳を持たなかった。

「嬢ちゃんはネズミやゴキブリがこの廃ビルにいたとして、それらをわざわざ追い出すのか？ それと同じだろ」そんな男の反論はなんともくだらなかった。「ああ、アイツもそんなこと言ってたな」独り言のような言葉もさほど気に留める必要を感じない。

勝手にしろ、と放り放った私の言葉。それになんとも嬉しそうな表情を浮かべた男。今でも頭に残る。気持ちが悪い。

炎は燃え上がらない。内にも外にも。降り続ける雨も作用して、火種が完全に消えてしまったのではないかという不安が過る。そこに体調の悪さが乗じて、私は寝転がってしまった。男がいるが、さ

ほど問題はないだろう。それは別に心を許したなどということからくるのではなく、男に対する危機感よりも自分の体のほうが気にかかったからだ。五メートルの距離は男が取った。ちょうど入口を塞ぐように。気遣い、という言葉が昔はあつたらしいがそのようなのが今にあるとは思えない。

視線は窓に真っ直ぐ向けている。雨が視界に入るが、男に顔を見せることの方が嫌な気がしたのだ。

「生物学はちよっと齧った程度だが、超能力の発現、つまりヒトの進化についての論文も読んだことがある。あれは進化ってよりは、改造だな。技術の発達を進化って呼ぶなら別だが、とにかく衛星打ち上げてそこから生物の遺伝子に影響を与える電波を飛ばすなんて正気の沙汰に思えねえよ」

男は説明口調だ。妙にその声色が明るいので、おそらく笑顔で話しているのだろう。やはり科学者であるからか。無論、わざわざ笑顔を見るために振り向かない。確認などしない。気持ちが悪い。

「哲学が足りねえんだ」男はまた独り言のように付け足す。「アイツもそんなこと言ってたな」

沈黙が僅かに生まれる。その間、妙に雨の音が耳に障り嫌気を覚えた。男は何かを思い起こしているのだろうか。背後から響いた小さな溜め息が雨音と重なり、吐き気すら催す。耳を塞ごうかと考えたがあえてしない。それは億劫というよりは、屈辱に思えたからだ。

「すごいや、嬢ちゃんの名前はなんだ？」

「アデイ」

「ん、答えてくれるのか？ 意外だな」

「お前の声をただ延々と聞いているよりは気が楽だ」

本心を吐いたばかりだったが、後に続き何故か笑い声がする。薄笑いではない、馴染みのない笑いだ。男はよく笑う。何が愉快なのか私には理解できないが、なににしても私は不愉快だ。不平に口が歪む気がする。懐かしい、動作だった。炎は燃えない。

「そうか。そのアデイって名前は、誰が付けた？」

野暮なことを訊くものだ。無意識に眉間に皺がよる。

「私だ。それ以外、誰が付ける？」

「確かに、な。だが、良い名だ」

「……愛着はない。ただ付けただけだ」

「ただ付けた？ おかしいもんだな。この世界を生きるために名前が必要ねはずだが」

しつこい。顔が熱い。舌打ちが飛び出るよりも前に言葉が出る。

「個体としての名詞は必要だ」

「冗談はよせ。アデイは自分のことを思うとき、自分をアデイって呼ぶのか？ 自分への名詞はいつの時代でも自分で十分だ。他人でも、誰かでもねえ」自慢げに語る男だが、間もなく間延びした声の先に唸り声が響く。「アイツはそんなこと言ってねえなあ」

間もなく続いた笑い声。緊張感がない。だがそのような声は、私の熱くなった頭を冷やしてくれた。自然発火の暴走は男に止められる。

なるほど、私は内心で納得した。男に覚えた不快感、炎を掻き消す行い全て、雨音に重なる溜め息、変わりやすい情緒。男は雨なのだ。

「……愛着はあった。だが消えた」

「どうやってだ？ 名前がある限り、そうそう消えるもんじゃねえだろ」

「燃えた」いや。私は否定するように言葉を繋げた。「私が燃やした。過去が残るから」

「燃やした……か」

男は神妙な声色で呟く。雨脚は変わりやすい。だが一度降り出した雨は、そのまま止まないのだ。

「アデイの超能力は、発火能力だったな。そのマッチを炎のイメージ媒体として異種クオリアを発生させるタイプ。そうだろ？」

「詳しいことは分からない」

「まあいいさ。俺にはマッチをイメージ媒体にした理由が気になるが」男は一旦言葉を切る。それは自然だった。間が開いた途端に雨が気になってきた。「それよりも、アデイが燃やしてきたものはなんだ、ってことを訊きてえな」

私が気になったのは本物の雨の方だ。今にも止みそうに、しとしとと弱弱しく降っている。いや、もう止むのだろうか。私はおもむろに体を起こした。

「過去だ。そのついでに、ものが燃えた」

「ものがついで、か」男は笑いもしない。雨脚を確認する私の背中に、ただ視線を向けている。そんな気がする。「それなら、過去がたたくさん停滞している場所がもしあったら、アデイはそこを燃やすか？ 燃やし尽くすか？」

体の調子は悪くない。燻ぶりを上げる赤い火種が確かにある。もう歩けるだろう。行けるだろう。

「本当にある場所を言うような口ぶりだな。そこは何処だ？」

「言うならヒトが化石になる場所だろ。年層だ、ネンソウ」私は首を傾げかけたが、それを止めるように男は続ける。「行けばわかる。ここから北に真っ直ぐだ」

私は方角を頭に思い浮かべる。地図というものはないが、私が向かうと思った方向と同じようだとはいえ、だがそれが男の仕事だことのように思えて、やや癪しゃくなのだが。

「つまらない謎かけは止める。そう言えればいい」

「ん、行くのか？」

私は振り向く。変わる視点。視界の端に捉えた男の姿は冴さえない。男も立ち上がっていた。たゆたうぼろぼろの白衣。ぼさぼさの黒髪。頬は私以上には痩やせていない気がする。そういえば、何処どこから来たのかなどと私は訊たずねなかった。そもそも男のことを、私は何も知らないのだ。

しかし、今さら何かを知る気にはならなかった。記憶にある男の存在も、やがて炎にまかれて消え失せる。儂いものだ。元より感傷に浸ることではない。一步一步と男に近づき、やがて一步一步と男から離れてゆく。返事もなにも、もうしないつもりでいた。

「アデイは過去が嫌いなのか？」

笑顔かと思った男の表情は悲しげだ。悲しげであっても、殺してきたヒトの表情とはやや違うように見えた。

「嫌いだ。想起する過去は私を停滞させる。そして無駄に苦しめる」
ふと開いた口。自然だった。言葉も仮初めの感情も用意していなかったのに。これが真情の吐露とろというものか。くだらない。炎は燃え上がる。

「『人が想起する過去、思い描く未来は人の現在を豊かにする』」

「それも、“アイツ”が言っていたのか？」

「……いや」すれ違ちがいざま、男は小さく笑った。横目でそれらが捉えられ、私は不平そうに唇を歪める。やはり懐かしい動作だった。炎は燃やさない。「昔の哲学者が言っていた」

思えばそれが、男と最後に交わした言葉だったのかもしれない。耳に残るのは沈黙。いや、炎が沈黙しか残さないに過ぎないのだ。あとに幾つか言葉が残った気がするが、そんな憶測もろとも炎が焼き尽くす。炎により舞い上がり心を湿らす水蒸気が、雨のせいだと思おもうと鬱陶うつとうしかった。

「またな」そんな言葉に対して、返事代わりに思ったことが続けて聞こえたように思う。「アイツはそう言っていた気がする」

最初に覚えたのは異臭だった。それを私の中にある僅わずかながらの知識で形容するならば、硫黄特有の臭いに加えて形のない電化製品の錆臭さびくささが鼻を突き、おもむろに呼吸を止めた時には、余韻として鉄の味か血の味が分からない何かが、味覚のそれのように嗅覚で感じられた。それ以上は形容しない。それは出来ないからということではなく、いちいち感覚に止めるのが億劫おっくうだったからだ。

ここ最近では気候の変化が激しい。雨は止んでいた。私の胸の内では控えめに燃えていたが、思い起こされた知識は確かに炎に巻かれて灰になる。以後、なににも形容されない異臭共々は、灰の上に悲愴ひさうの面を浮かべて落ちた。陳腐な表現だ。くだらない。

私は日頃から感覚を遮断している。血の生臭さ、雨に打たれたコンクリートの臭い、昔は太陽の匂いと表わされたらしき服にこびり付く幼稚な臭い等々。私の嗅覚はそれらには特に働かない。一種の慣れ、というものが所以ゆえんしているのだろう。逆に、私が常に働かせているのは視覚と聴覚だ。どのようなシグナルにも機敏に反応する。先ほどのように雨の男の声に反応できなかったことはあるがそれ

は深く考え事をしていたからで、普段はどのような音にも反応する。視覚もまた然り。そのせいだろうか。此処の音は奥深く聴き取られ、光景は否応なしに網膜に刻み込まれた。

沈黙。沈黙も音なり、と人間は言うことがあったらしい。まさにそうだな、と私はそれでも大した感動を覚えずに思った。知識にただ照合される今には小さな耳鳴りすらない。誰も大声を上げてその非業を刻まない空間の端に、まさに取り残されたようにぼつりと置かれた私は躊躇なく息を吐いた。それよりも誰が沈黙しているのかと問われれば私は誰かがと謎かけのように答えるだろうか。陳腐な応答だ。しかし、くだらないとは切り捨てられなかった。

炎はさらに縮こまっている。それは目の前の城塞に怯んだからだと因果付けても狂いはあるまい。天高く、それこそ一種の建造物のように佇む山、もちろんゴミの山。過去の残滓。否、それはたいそう大きな遺物であったり私には異物であったり、昔居たらしい病的なエコロジストには忌物であったりするのだろうか。残滓などというちっぽけなものではないのだ。まさに過去そのものたる莫大な堆積が、私の全視界をいとも簡単に覆い尽くしている。

正直なところ、私は臆していた。目の前にある巨大な堆積物が、今にも私を食らわんと牙を剥いているように見えたのだ。沈黙がその咆哮であるかのように、私に放たれては消えてゆく。呆気ないのであるとは感じたが、気付けば私の呼吸の音すらも沈黙の中に飲み込まれている。残りかすですら残さない。大津波だ。そこで私は久しぶりに感動のようなものを強く覚えた。畏怖や憤りなども混じった複雑なものであったが。

焦躁に煽りを上げ、それに対する僅かな怒りにさえ大した動きを見せず、炎は内外共にただ停滞していた。男が言っていた場所が

このゴミ山であることに気付いたのは辿り着いてからすぐであったが、男が何故此処を勧めたのかなんとなく理解したのはたった今だった。炎は燃え上がらない。それが止んだはずの雨のせいだと思おうと、思わず舌打ちをしてしまう。そのようなものも沈黙が飲み込んでしまうのだろうか、その時舌打ちを止めるように声が響いたので私は思わず眼を見開いた。

「このゴミ山にはいくつも死体があるんですよ。それは今も昔も当たり前前で」咄嗟にポケットに手をつ突っ込んだが、声色は拍子抜けするようなものだと思付く。男にしては高い。少年の声だ。「ちなみにあなたは、この死体とは一緒にならないようですね」

見る。ゴミ山から逸れた視界。捉えたのはゴミ、ヒト、ゴミ。どういうことだと自問する最中、小さな金属音が耳に響く。それは沈黙には消えない。かちりかちりと歯を確かめるように音を鳴らし、まるで沈黙を沈黙させていた。いや、言葉がおかしい。私なりに正しく言い直すなら、沈黙が無音になったのだ。

「化石って知ってますか。ぼくは見たことはないんですが、ここはヒトが化石になる場所にはびつたりな場所だと思っんです。実際に化石にはならないみたいですけど」何処かで聞いたことの話だと気付く間もなく、少年は続けた。「年層です、ネンソウ」

「……なにをしにきた」

挨拶代わりに吐いた言葉。すると、出逢いがしらにするのは攻撃ではなく挨拶、という言葉がふと思いついて起こされて癩だった。男の姿が浮かんでくる。相変わらず炎にまかれぬその姿を消そうと、私は意地でも目の光景に執着した。少年の体は小さい。少なくとも私よりは。数メートルほど離れた距離であるが、それははつきりと分かった。少年はシミと穴で形作られたような無地のTシャツとハ

「フパンツを身に着け、その肌は僅かに黒ずんでいてまるで焦げているようだ。丸い顔の上に丸い眼があり、黒の短髪に隠れない表情は柔らかい。笑顔とは言えないが、口を開く度に楽しそうな表情が映える。そこに男の姿が重なって、奇妙というよりはやはり気持ちが悪かった。」

「なにを、って」その時の少年の顔は、私に攻撃されそうになった時の男の顔に似ていた。「ゴミ拾いに決まってるじゃないですか」確かに、と私は呟きかけた。先ほどゴミ山を沈黙させた火ばさみが少年の右手には握られ、左手からはプラスチックの袋が吊り下げられている。袋は大して大きくはない。その中に何が入っているのか気になったが、ゴミだと言うならそれまでだった。

「……いや」それよりも、だ。「どうしてお前はゴミ山の下でゴミ拾いしている」すると少年は、素っ頓狂な声を上げて大きく首を傾げた。それがあまりにもわざとらしく見えて私は苛立ちを覚えかける。だが間もなく、少年が大きな笑みを浮かべたからか苛立ちよりも呆れが顔に出たようだ。

雨は降らない。だが依然として大きな何かが、炎を抑えつけている。陳腐な表現だ。その通りのようであったが。

「いちおうゴミ拾いは趣味なんです。ぼくの」

思いついたように口にされる言葉は、およそ三メートル先から聞こえてくる。今腰かけているものが冷蔵庫という名前のものであったことを確認しながら、私はそれと同じような思いで少年の声を聞

いていた。昔本で知った空中ブランコのように、私の両足は揺れる。髪を撫でるように吹く風が、私にはやはり鬱陶しくて意図的に顔をしかめた。その時にふと気づいたのだが、実際ゴミ山には沈黙や無音はない。確かに先程までは気が狂うほどの沈黙や無音が私の聴覚を支配していたのだが、今では確かに音が聞こえてくるのだ。ゴミ山の隙間を、言うならばこの巨大な堆積物に奇跡的に作られたそれを器用に通り抜ける風の音がする。

「ゴミ山の口笛です。この音って口笛みたいじゃないですか？」ゴミ山が口笛を吹く。陳腐な擬人法だ。「嬉しいから吹いているんでしょうか。それとも寂しいから吹いているんでしょうか」だが、間違いとは思えなかった。

私に背を向け、近場のゴミを拾う少年の姿をぼうつと眺めながら、むやむやと胸の内に立ち込める何かを私は感じていた。それは炎から上がる煙のように、薄黒い色をまき散らしながらいろいろなものはいいかげんにしてゆく。閉塞された屋内では、それが外に出ることはない。

しかし私の胸の内にあるものは、煙そのものではない気がした。

「……話を逸らすな。ゴミ拾いの理由、答えになってない」

「そうですか？ 趣味でいいじゃないですか」

「とにかく利己的じゃない。だから意味が分からない」

「利己的じゃない、とは？」

「……自分の利益を考えていないということ」調子が崩れる。この呆れも誰に向けているのか分からなくなってくゆくようだ。「昔の言葉だ」

すると、やけに真面目な唸り声が聞こえてきた。少年は火ばさみを噛み合わせるように鳴らしながら、明後日の方向を向いている。

私もつられてその方向へと視線を移せば、厚い雲が視界の全てで捉えられた。視界が捉えたというよりは、視界が覆い尽くされたということだろうか。雲は光を遮り、音を吸い込み、限りないかのような大きさを誇り、空から私たちを見下している。そして雨が降り落ち始める場所でもある。そう考えれば無性に腹が立つてきた。押さえつけられていたはずの炎が沸々と、獣のように這い出してくる。燃えろ、燃えろと呪詛のような言葉が吐き気のように催される。歯が能動的に噛み締められる。

「ぼくはそんなことを考えたことはありませんでした」

だが雲の大きさと形と本質は、私の気持ちすらもいいかげんにしてしまふのだ。一気に膨れ上がった炎が、見る影もなく縮こまる。天高くにある、まさに形無き巨大な建造物は掴みきれない。それでも、確かな存在として私の視界を覆い尽くしている。炎では燃やせない。さらには雲と共にあり、それを移ろわせる風は、私の炎すら簡単に掻き消してしまうのだろう。それでも炎を掻き消さないのは、雲の優しさや情けのように思えた。もっとも当の私には、全くいい気がしないのだが。

「今考えてみましたけど、やっぱりあなたの考えに合う答えは見つかりません」少年は言う。その時に見えた背中は大い。だが、何故大いなのだろうかと私が考え始めた時には、少年の背中は今までもかというほど小さく見えた。「でも、ぼくなりの答えはあります」

振り向く少年。その誇らしげに微笑む様子は酷く眩しく思えた。ちようど背景に淡い光が差し込み始めたからだろうか。炎を見つめる時にはそんなことはないのに。光はゴミ山の細部まで照らした後、雲に覆い尽くされて呆気なく消えた。すると、視界に映えていた少

年の表情が異様に霞んで見えたのだ。そのゆくりない変化。思わず顔をしかめた私に、何故か少年は微笑みを深めていた。

「ぼくが行動を起こす条件は、行動を起こさない理由がないことです。だからなんです」

「……なんだ、それは」

返事はない。なにかを悟っているような態度だ。それでも私が苛立つことはなかった。少年は掴みよのない雲のように、私の傍を何気なく通り過ぎてゆく。今度は誇りもせず、謙遜もせず、ただそれが当たり前のように。雲のように。ああ、なるほど。雲なのだ。少年は雲なのだ。その全て、ましてや一部さえ掴めるとは思えない。それは諦めからでも、落胆からでもない。私は知らなかったことをただ知らされただけなのだ。

「燃やしに行きますよ」ふと耳を擦ったキーワード。それが雲の少年から響いたのだから、咄嗟にでも後ろを振り向いてしまふ。「ゴミを拾ったら燃やすのが当たり前じゃないですか」

昔本で知った空中ブランコのように、私の両足は揺れる。風が吹く。雲がたゆたい、移ろい、ふとした拍子に生まれたその裂け目から光が注ぐ。淡い茜色と形容される光だ。ゴミ山が一瞬だけ大きな影を作り、その大きな影法師に飲み込まれた私と少年のそれ。おかげで揺れていた空中ブランコは、誰にも知られず地に足を付けた。「行くのか」私は訊いた。尻についた汚れを払う。

「はい、行きますよ」少年は頷いた。暗闇のなかで密かに微笑む。手招きはなかった。だが、少年に向けて踏み込んだ足に違和感はない。陳腐な感覚だ。とうてい私のものとは思えなかった。

「何処へ行く？」

「此処から南の方へ真っ直ぐです」

「南？」

訊き直そうと思ったが、止める間もなく雲は流れてゆく。夜風を騙る何かが私の脇をすり抜け、目前を歩く雲を加速させた。雲は雨を連れて。いいや、おそらく雲は雨の降る場所へ私を誘っている。ここ最近では天候の変化が激しい。霧雨が私の背中を押し始めている。冷たさは覚えなかった。慣れ、というものが所以ゆえんしているのだろうか。

ゴミ山から口笛が聞こえる。嬉しそうで、悲しそうな口笛だ。沈黙や無音はない。それを捉えていた聴覚は、悲愴の面を浮かべながら私を見上げている。「利己的ではない」と誰かが呟つぶやいた。だが構わない。構わないのだ。

先ほどまで押さえつけられていた炎は燃えている。確かに燃えている。大きな何かに包み込まれていることを感じながら、ほどよく燃えている。胸に立ち込める黒い煙は消えていた。

羽織るパーカーのフードを被り、ゴミ山を踏みつけて歩き出す。誰かが背中を押す。急がなくてはと、あえて呟つぶやいた。

「つまり、これは近代科学のテクノロジーを応用していな。半永久機関として動いている」視線を感じた。その先に苦笑いがあるのを知っていたから、私はあえて視線を返しはしない。「アイツなら興味津々に聞いてただろうな」

くだらない。しかしそう思っても口に出せないもどかしさ。それは何処どこから来るのかと考えれば、全ての原因は自分にあるような気が

がして腹が立つてくる。思わずした舌打ちは、自分でも苦し紛れに思えた。

「またな、って言っただろ？ アデイとはまた会うと思ってた」再会した時の男の第一声が思い起こされる。やはり雲の向かう先には雨があったのだ。それに気付いていながら向かったのは誰なのか。「だったら、アイツともまた会えるんだろうな」他人でも誰かでもない、私自身だ。

ここ最近では天候の変化が激しい。雨脚は強く、雨が地を打つ音が天井から聞こえてくる。雨音は閉めかけた扉からだろうか。それが辺りを反響し、ちよほど嫌になってきていた。胸の内の炎は目の前の焼却炉に移されたようだ。

「ぼくは面白いと思いますよ」

誰が拵こしらえたのかと思うほど清潔な地下空間。ヒトの声、機械の無機質な音、これみよがしと響く雨音。全てが無茶苦茶に混じり合い、それでも私の感覚へ丁寧ていねいに溶け込んでゆく。慣れ、というものが所以ゆえんしているのだろうか。ゴミ袋を焼却炉に投げ込んだ少年は、その場で座り込んでいた。それを横目で眺めていた私は、何が面白いのかと思う。ゴミが燃やされる瞬間など。

「ああ、男のロマンだよな」

「なにがロマンだ。お前はいつの時代のヒトだ」

「今を輝く若者だろ。過去をでも、未来をでもねえ」

「それはアイツさんが言ってたんですか？」

すると、男はくぐもった笑い声を上げた。間違いない男は困っている。口にするまでも無い事実だ。だが視界で捉えたその背中では、嬉しそうに揺れていた。

「どうだろうなあ、坊主」男は何処から持ってきたのかと思うほどの大量の工具を持ち替えながら使い、楽しそうに焼却炉を弄っている。「俺は科学者だから分からねえ」

「科学者だから、はまず理由にならない。というより、お前は本当に科学者か？ 昔の言葉なら、エンジニア、と呼ばれるんじゃないか？」

「おしゃべりになりましたね。アデイさん」いつ覚えたのか、少年は馴れ馴れしく私の名前を呼ぶ。睨みつけようかと思つたが、その気も失せてしまった。炎はないのだ。「だいたいその人は科学者でもエンジニアでもありませんよ。元科学者に決まってるじゃないですか」

そもそも雨と雲は同じようなものだ。少年が笑えば男も笑う。男が笑えば少年も笑う。そういうえば天候が変わりやすいように、雲も形を変えやすいのだ。男が顔をしかめれば、少年もそうするのだろうか。思い浮かべた二人の表情。その片隅で顔をしかめる私の姿が映り、空想と現実が混在する。いや、今がその時ではないのか。

疎外感。孤独感。昔、本で読んだ知識がふと思いつき起こされる。思いつき起こされるだけだ。それらの言葉はなにもカテゴライズしない。ましてや私の気持ちを代弁するなど、馬鹿馬鹿しい。

雨の音がはつきりと聞こえていた。誰にも頼まれず、とりわけ気にも留められず、ただ滴り落ちる。そんな気がした。そして、それにも留められず、ただ滴り落ちる。そんな気がした。そして、それが涙に思えた。暗闇の中で誰かが泣いている。独り、泣いている。透明色の雨が輪郭を持たず、落ちる。ただ落ちる。余韻として残ったのは声だ。低い唸り声から嗚咽のようなものが聞こえる。それに對して耳を澄ませば、今度は爆音が耳を突き抜けた。不意を突かれ、

聴覚がマヒし、何も聞こえなくなる。誰かが笑った。それだけは分かった。しかし何が残るのか。私は何を覚え、何が残るのか。

「……っと、嬢ちゃんと坊主」その時、働かないはずの嗅覚が跳ねあがった。鈍つても、研ぎ澄まされてもいない触覚が、その理由を認識する。「とりあえず、これでも食え」

手元に落ちた何か。なんだろうか。すっかり縮こまっていたはずの感覚がぞわぞわと働き出す。古びた紙箱。文字が書いてある。過去の残滓。だが炎はない。震える手で紙箱を千切るように開ける。その中ではさらに丁寧な包装がされていた。私がそれを理解した時には、マヒした思考の中でも口にする言葉は既に決まっていた。

「……お前はいいのか」

その言葉はもちろん男を心配したようなものではなかった。それは当たり前のようなことだが、とにかく男のしたことが信じられなかったのだ。

「落ち着いてるだろうが、らしくねえな。嬢ちゃん。ヒトから食べ物を買ったら、まず毒が入ってないか確認するべきだろ？」後に続く笑い声はなかった。その代わりに、寂しそうな背中が私の目の前にある。「アイツはしねえが、嬢ちゃんはするはずだ」

ここ最近天候の変化が激しい。雨は萎びたような音を漏らす。そういうえば、何故こんなに天候の変化が激しいのか私は考えたことはなかった。おもむろに自問しようとしたが、隣から聞こえた音に止められる。噛み砕く音。食する音。生きる音。その延長線上で、響く声という音。どれも馴れ馴れしいとは思えなかった。

「大丈夫に決まってるじゃないですか」横目で捉えたのは、少年の満面の笑み。特に眩しくはなかった。慣れ、というものが所以しているのだろうか。「その人は元科学者なんですから」

後に続くのはやはり咀嚼する音。その背景に淡い薄笑いが響いたのを少年は知らないようだ。そこで私は、手元の携帯食料を見つめながら、先程までの自分の理解を否定した。雲と雨は決して同じではないのだと。どちらかとも炎を抑え、鎮めることが出来る。しかし、違うのだ。なにが所以ゆえんとなつていのかは分からないのだが。

「食えよ、アディ。俺には必要ねえんだ」低い調子で声がする。既に焼却炉は停止し、男の手も動いてはいない。「俺の超能力は、不死的な何かだからな」

男に言われたからではないが、ほぼ無意識に私は包装を開いて内容物を取り出した。以前炎が過去を燃やし、はつきりとは分からないのだが私はしばらく食べ物というものを口にしていない気がする。手に取った長方形の固形物。この匂いだ。嗅覚が跳ねたのはこのせいだと、私は今さらながら自覚する。

「食いながら適当に聞いてくれりゃいい。俺はさ、この焼却炉みてえに永久機関持つてるらしくてさ、それが俺の超能力らしい。んで、長生きするって言われたんだ。アイツにな。だが、嬉しくはねえんだよな。生きてるからなんだ、ってさ。こういうこと考えてるから、俺って今のヒトに見えねえんだろ？ 時々、深く考えちゃうんだ。なあ、なんで生きてんだろな。俺たちは」

「知るか」

返事をすると同時に、私は固形物を口の中に放り込む。くだらないう言葉は食べ物と一緒に飲み込んだ。もどかしさなど欠片もない。ただ噛み、噛み砕き、咀嚼し、飲み込み、食い、食らい、ただ生きる。それ以上、それ以下というよりはそれ以外は考えられなかった。

「ぼくはそんなことを考えたことがありませんでした」食い終えたのか、私の口から漏れだす音を背景に少年が言葉を口にする。その表情は穏やかだった。「今考えたことなんです、ぼくは生きるために生きてますよ。そうに決まっています」

間もなく、誰に吐くわけでもない溜め息が静かに響いた。その後続いたのは笑い声。違和感。形容できない何か、透明色の輪郭を持たない雨のように落ちた。私の胸の内にただ落ちた。だがいつの間にか戻ってきた炎に、それは燃やされ、蒸発し、掻き消える。疎外感。孤独感。二つの言葉が何かを定義付けようと、微笑みを投げかけている。それは、誰に。

「ああ、だよな」後に聞こえた言葉は炎にまかれてゆく。「アイツなら納得しねえだろうが」

ふと目が覚めた。

その前に私がいつ眠ったのか思い出す必要があるだろうが、昼間に雨宿りをしたビルの一室にいることを見れば、特にその必要はない気がしたのだ。寝息。聞けば酷く能天気に見えるそれは、二つ聞こえる。一室の隅っこに三人それぞれが陣取り、今の今まで寝ていたのだ。真夜中の静寂が皮肉を吐く。構わないと思いつつも、私に毛布を誰がかけたのかという事は、今さら問わない。

くだらない。自問しない理由はそんなことではなかった。研ぎ澄まされた聴覚が機敏に反応する。静寂に小さな足音をつける何かを、私は両耳で確かに捉え、行動し始めた。いつか身に付けた忍び足で

部屋を出る。二人を起こさないため、というのは優しさに思えるかもしれないが、少なくとも起こさないためというのは正しかった。

「縷の灯りもない。暗闇が視界を支配する。粘着性の大気が首筋を舐め、寒くもないのに悪寒が走った。荒くなる息遣い。ヒトが闇を恐れるのは生物的な何かが所以しているらしい、とそんな知識が私の思考に言い訳のように置かれる。確かな焦躁に駆られ、私はマツチを取り出し、炎を現させた。燃やすものはそのような知識。過去の残滓。炎は豆粒ほどの大ききで、私の視界から闇を削るように浮遊している。足元を確かめ、私は音の方へ一歩一歩と慎重に進んだ。

先程思い起こした生物的な何かをヒトの本能と呼ぶのなら、闇を恐れるのはそのような本能のみではない気がしたのだ。すると、男が昼間に引用した哲学者の言葉がふと脳裏を過った。ほんの一瞬であつたが私の思考の主軸にその言葉があるような気がして、目前の炎が掻き消されてしまうように思える。実際、炎は狼狽するように燻ぶっていた。

いや、そんなことはない。そんなことはないのだ。

ふと視界の端で捉えた夜空。黒色の絵の具をただ塗りつぶしたような空。その先には星というものがあるらしいが、もちろん今は見えない。何故なのだろうか。此処から見える夜空が本質的に黒いからなのか、元より星は私の眼には見えないものなのか、それとも今厚い雲が夜空を覆っており、私はその夜空を装っている雲を見ているに過ぎないからなのか。

「なるほど死にたいのか」

瞬間、声がする、前方。人影一つ。表情は見えない。歩く。向かつてくる。その様はゆらりと、それはまるで空中を舞う紙切れのよ

う。真つ直ぐに伸びた背筋。垂れた両手。何かを握っている。それは何か。それは何か。

「おまえは死にたいか。わたしは死にたいか。おまえは殺すのか。おまえは殺されるのか。誰に、誰に、わたしに、おまえに」

声の調子は低い。それでいて、声そのものは少女のそのよう。断絶する思考の糸に眼もくれず、私はマツチの先端をそれに向けたすると、豆粒大の炎が人影を照らす。はっきりと確かに照らす。

「わたしは誰だ。おまえは誰だ。わたしはおまえだ。おまえはわたしだ」

闇に映えた痩せこけた頬。闇に映えた淀んだ瞳。闇に映えた無表情。その無とは何か。細い腕に握られるそれはなんだ。刃物か。刃物だ。私を刺した刃物だ。過去にあるはずの刃物だ。何故あるのだ。刺されるのか。刺される。殺される。過去にある刃物で。私は殺される。

「おまえはおまえに、わたしはわたしに」私は、過去に。「殺される」それ以上、それ以下というよりはそれ以外はない気がした。

「燃えろ」感情も感傷も焦躁もなにもない。ただただ嗚咽にも似た声が漏れる。「燃えろ、燃えろ」それは呪詛のようにも聞こえた。

消えかけていたはずの炎が激しく燃える。燃え上がる。目前の浮遊物は爆発物に形を変えた。まさに爆弾。そう爆弾なのだ。炎は綺麗な球体の形を成し、その美しさに胸の内の湿り気が一気に消え去る。不意に薄笑い漏れた。誰が望んだか、そのカタルシス。雨も雲もない。何を思うのだ。何を覚えるのだ。燃えろ、燃えろと呪詛のように口にされる言葉。今さら何を呪うのだ。何を呪うのだ。私だ。私は私を呪うのだ。雨のように変わることもできず、雲のように掴みよのない姿にもなれない。過去を嫌い、恐れ、逃げたのは

誰だ。燃やすという口実。言い訳は誰が紡ぐのだ。誰だ。誰だ。誰だ。止まらない。止まらない。

「全部、燃えろ」

間もなく、爆音。大気が震え、地が揺れ、莫大なる熱が私の体を覆い尽くす。熱だけだ。炎は私を焦がさない。ただ炎は胸に立ち込める全てのものを巻き込み、それを唯一の燃料とし、ついでに目の人影を燃やす。燃やし尽くす。

その必要はあるのか。私は何を燃やすのか。何がために燃やすのか。否、答えなどない。それらの憶測も炎にまかれて消え失せる。消え失せるのだ。

どれほどの時間が経っただろうか。目前には夜空。炎は届かず、削られることがない闇が果てしなく続いている。いいや、あの闇は雲なのか。一歩先に足場はなかった。まさに断崖絶壁に佇む私。内にも外にも炎はない。ないというよりは、ほとんど感じられなかったのだ。果てしない喪失感。底のない大穴が胸にぽっかりと空いているようだ。それは灰として残ったものと変わるのか。何が変わるうか。

「アデイさん」背後から声がする。振り向くつもりはなかった。「あなたは今死にませんよ。まだ死にませんよ。生きるに決まっているじゃないですか」

ああそうなのか。私はまだ生きるのか。

雲はおそらく微笑んでいる。暗闇の奥で理解のし難い笑みを浮かべているのだ。さらにその奥で、雨は悲しげな視線を私に向けている。それは今に小さく、確かに降り注ぎ始めていた。

燃燥リコレクション

さあ、思い起こせ。

アダムとイヴが風俗ビルの空き家に住むのは今の虚無だ。そんなことを、この世の最期を詠った詩人が提唱していたらしい。

「ああその通りだな、間違はなくその通りだ」男は自嘲気味に答える。「アイツはそう言うだろ」

実際にそうなのかも知れない。

湿った今の現実。誰が湿らせたのかと問わせないように、辺りで大声を上げるのは雨、まるでバケツをひっくり返したような土砂降り。焦燥の灰は赤くもない。髪がべったりと頭に張り付くが、とりわけ不愉快には思えなかった。呼吸が小さくなる。体が衰弱してゆくの手に取るように分かった。心の中には水が張っている。潤った、などという表現は出来ないのだ。その水は冷たい。誰かの涙が私の頬を撫でる。その確かな情け。私は俯いた。水は引くことはない。大洪水だ。

想起しよう。昨日を。忘却を忘れたこの僅かな時間を。

『人間というのは、眩しい時と笑う時に、似た表情になるんだな』
独り言のように男は言う。「昔読んだ小説にあった言葉だ」

今日も気分が悪い。相変わらず炎は燃え上がらなかつた。雨にこそ濡れてはいないが、ねっとりとした悪寒が体に纏わりついている。それを言い訳に、私は寝転がっていた。現在、雲は北に流れている。

あたかも空がさめざめと涙を流すように、降る雨を崩れたビルの大穴から眺めながら、その背景にある灰色の空に視線を移す。時折雲の切れ目から差し込む淡い光が、私には異様に眩しくて眼を細めた。これが笑みなのだろうか。確認するために振り向けば、五メートル先で男は目を瞑り、小さく頷いていた。眩しいのだろうか。男も笑っているように見えた。

「アデイ、デストロドーって知ってるか？」この先の言葉はもう常套句であったが。「アイツがよく言ってた言葉の一つなんだけだな」

私の返事はない。それは億劫ということからくるよりは、単に言葉が見つからないためであった。

「簡単に言えば、生物が自身の死を望むってことだ。ヒトにはそういうものが本能的にあつてだな……ほら、ヒトが昔より凄く数が少なくなつたのは知ってるな？ その一番の原因はなんだか知ってるか？」私の返事を待たず、男は続けた。「昔世界中に核爆弾を主とした大量殺戮兵器が降り注いで、確かにヒトは沢山死んだ。だがヒトが沢山死んだ最もな原因は、その後に相次いだ自殺だ」

「……それがデストロドーか」

男は得意げに笑う。眩しそうな表情と笑みを浮かべる表情の境目がはつきりとしてくる。雨脚が弱々しくなってきた。

「ヒトという種全体としての、な。だいたい世界に核爆弾をばら撒いたのだからデストロドーの一環だ。昔はみんな死にたがった。俺みたいに、生きる意味とかいろんな複雑なことを考えたらしいか

らな」男は説明口調だ。しかしその話し方は、とても生き生きとしている。「哲学が足りなかつたんだ。アイツもそう言うだろう」

「……それには、超能力の発現も影響しているのか？」

私の言葉からか、その時に男の表情が変わる。やはり男は雨だ。私は安心したような思いで、その思索する表情を見つめた。

ここ最近では気候の変化が激しい。弱々しくなっていたはずの雨脚は、再び強くなる。雨音は既に心地よいものとなっていた。

「生物学は齧った程度だが、超能力の発現によるトレードオフが影響しているのかも知れねえな。アデイの言う通りだ」男の渋い表情から、明るいそれへと変化する。「ああ、トレードオフってのは生物学用語で、な。ある機能が発達することで別の機能が発退することを意味してる」

「……それで、なにが衰退したんだ？」

すると困つたような表情を浮かべる男。それは知らないことを訊かれた気まずさからというよりは、男の優しさからのように見えた。「ん、これは言っても分からねえだろうが……」やや間を置いた後、男は唸り声の延長線上にその言葉を置いた。「とやかく考えること、だろ」

気分は悪く、天気はいっそう悪い。とある郊外の外れ。昼、私は一人歩みを進めていた。時折、誰かが風に救いを求めるようにそつと身を寄せる。冷たいよ、冷たいよ、と。そんな調子で空間に刻み込まれるのは、嗚咽とも笑い声とも区別がつかない声。頑なに無視を続けていた風は、ビルの隙間を吹き抜けたり、遠方から連れてき

た雨を私に叩き付けたりする。誰が悪いのか、よろめく私の中に答えはない。ただ進むだけ。ただ進まなくてはいけないのだ。

すると風に乗じて、何かが私の体に飛び込んでくる。視界の真正面でそれが捉えられた。首だった。ヒトの生首だった。酷く腐敗している。その顔を見、私は慌ててそれを払い除ける。死体。過去の残滓。しかし、炎は燃えない。乾きに飢えた胸の内の水たまりで、火種は沈んでいる。

想起しよう。昨日を。忘却を忘れた僅かな時間を。

「この人はデストロドーさんというらしいですね」雨の上がった昼下がり。少年はゴミ山の年層から引きずり出した死体をこれみよがしと見せつける。「元科学者さんが言ってたから正しいに決まってるじゃないですか」

私は日頃から感覚を遮断していた。血の生臭さ、雨に打たれたコンクリートの臭い、昔は太陽の匂いと表わされたらしき服にこびり付く幼稚な臭い等々。私の嗅覚はそれらには特に働かないはずだったのだ。その時は、一種の慣れ、というものが所以していた。

吐き気はなかった。しかし強烈な腐敗臭が嗅覚を支配している。少年の足元に積まれた死体。三つや四つはあるだろうか。それらに視線を向け、間もなく覚えた違和感。それらの死体はヒトと分らないほど腐り、崩れていた。しかしそれでも確かに分かったのは、全ての死体が同じ表情をしていたことだ。これが違和感の正体なのか。

「ちなみに、これと同じヒトが、昨日アデイさんの燃やしたヒトです」掴みよのない雲は、平然と言葉を口にする。「難しいことは

分からないですけど、量産型だとか、一種のデストロドーだとか、元科学者さんは言っていましたね」

なるほど、と私は内心で納得していた。この違和感は死体の顔を昨晚見たことがあることに所以していたのだ。気付いたところで、私は冷蔵庫に腰かけ、両足を揺らす。その様子はまるでやる気のない空中ブランコのようなものだ。

「アデイさん。ぼくは全ての死が見えるんです。変えられない、生き物の絶対的な死を」私はおもむろに無表情の死体を一瞥した。「いつ、どこで、どうやって、そのくらいのことには分かります。もちろん、ぼく自身の死も分かるに決まっていますよ」

「……私はどうなんだ？」

ダメだと思いつつ聞いた先で、何故か少年は微笑んでいた。

「教えられませんよ。別に教えてもいいですけど、それまでアデイさんが生きることにはなんの変わりもありませんから」やはり少年は理解できない。「とにかく、アデイさんはしばらく死にません」

ああ雲だ。雲だ。少年への認識も変わらない。達観しているのか、単に純粹なだけなのか。それすらも分からない私は、疎外感や孤独感すらも覚えてしまう。炎は燃えない。雲に手が届かないことをただ知っている。

「そういうお前はいつ死ぬんだ？ 分かるんだろう？」

「はい、もちろん。だけどその前に、このゴミ山のことをお話ししましょう。まあお話といっても少しです。この事実だけです」その時、ゴミ山が口笛を吹いた。寂しそうで、嬉しそうな口笛だ。「ヒトもそうなんですから決まっていますけど、ゴミ山にも明日までという寿命があるんですよ」

ゴミ山に辿り着いて最初に見たのは、大きな大きな炎だった。

ここ最近の天候は変わりやすい。雨は滝のように流れ出していた。

雲は移ろいやすく、掴めない。雲は早朝からゴミ山に向かった。

私は大きな炎を目の前に、一本のマッチを握っていた。

誰が望んだか、そのカタルシス。想起したことが回り周り廻り、大きな炎へとくべられて、その燃料となる。忘れるのか。私は忘れるのか。

雨の音が嫌になるほど聞こえていた。誰にも頼まれず、とりわけ気にも留められず、ただ土砂のように落ちる。そんな気がした。そして、それが涙に思えた。ゴミ山が作る影法師。その暗闇の中で誰かが泣いている。独り、泣いている。透明色の雨が輪郭を持たず、落ちる。ただ落ちる。余韻として残ったのは音だ。低い唸り声という音から嗚咽のような音が聞こえる。雨音、そして私の口から漏れる音だ。それに対して耳を澄ませば、今度は爆音が耳を突き抜けた。炎に包まれたゴミ山から響く、爆発音だ。不意を突かれ、聴覚がマヒし、何も聞こえなくなる。誰かが笑った。それは私だ。それだけ分かった。しかし何が残るのか。私は何を覚え、何が残るのか。

「燃えろ」

熱い。熱い。だが、燃えろ。燃えろ。燃えてしまえ。ふと脳裏を過りかけた過去は炎にまかれ、消える。表情が歪む。確かなその感覚。それが狂気か恐怖かは問われない。そもそも誰も問わない。だいたい誰もいない。そのような憶測もなにもかも炎に消えるのだ。「燃えろ、燃えろ」

独特の香りが濡れた鼻越しに私の鼻孔をくすぐる。働かないはずの嗅覚が跳ねるのだ。すると、燻ぶらず消えもしないかように燃え盛る炎が脳裏を過り、私は果てしない高揚感を覚えた。胸の内の湖が一気に乾く。その瞬間に平常を通り越して水分が枯渇した。

「全部、燃えろ」

口から漏れ続ける呪詛のような言葉。自分でそう形容するのはおかしいだろが、言葉と共に薄笑い声が唇から滑り出していると自身でも感じているのだから、なににしても救いようがない。本当に、救いようがないのだ。

止まらない薄笑い、呪詛。それらも熱の糧にしようと燃える炎、そのゼロ距離の延長線上で燃えるゴミ山。

慣れ、というものが所以しているのだろうか、轟々と音は立たない。聞こえない。

慣れ、というものが所以しているのだろうか、一抹の灰すらも残らない。見えない。

慣れ、というものが所以しているのだろうか、ただただ儂いなど思う。一際小さな人影が炎の中に映えた。

それでも、感傷に浸るほどの余韻はないのだ。

私はふと眩しさに眼を細めた。それが笑いなのか、単に眩しいだけなのか、自分でもどちらなのか分からない。炎を見る時はそんなことはないのに、と常套句のような言葉が置かれた。

私は見たのだ。青天と形容される空を。雲の向こう側を。炎が雲を突き抜け、焼け尽くす。陳腐な表現だと自嘲するが、そのようなものも天に届く炎の燃料となるのだ。

炎を掻き消そうと、私を止めようと、私の頭上を強い風が吹き抜ける。風は大笑いしているようにも、大泣きしているようにも見えた。

だが実際は無表情で、ただ私を見つめている。

——燃えろ 燃えろ 全部燃えろ

新しい自分に出会うため

溜息で吹き消すな炎 涙で失わせるな炎

雨にも負けて 風にも負けて 雪にも夏の暑さにも負けて

それでも この自分って奴には 負けるわけにはいかない

一人 立ち尽くす そこはまるで 焼け野原

(amazarashi「ワンルーム叙事詩」より)

END

あとがき

参考・引用文献

・世界の名著⑭アウグステイヌス

田中美知太郎 中央公論社 1968年

・死神の精度

伊坂幸太郎 文藝春秋 2008年

・現代でもっとも刺激的な環境問題

「今、世界で本当に起きていること」

トーマス・M コステイジェン 楓書店 2010年

その他多数の文献を参考にしました

参考・引用楽曲

・アノミー amazarashi

・ワンルーム叙事詩 amazarashi

・命の更新 taica

その他多数の楽曲を参考にしました

「救いってのは頼まれてやるもんじゃねえんだ」男はいつぞやの機械のスイッチに指を置いている。「アイツはそう言った」

私の唯一の制御スイッチに、ただ、指を置いているだけだ。

※この物語はあるべき未来のフィクションです。

THE NEXT STORY …… ?